

# 知的障害者に対する社会福祉学的介入方法について

中 嶋 夏 子

## はじめに

平成16年、私が大学4年の頃より知的障害者更生施設（通所）で生活支援員補助として勤務していた。そこで今回は、2004年4月より当施設を利用することになった女性利用者に焦点を当て、社会福祉学的視点から彼女に実際に関わり（介入し）、6ヶ月間にわたり彼女の施設での様子を観察し、彼女の行動や言葉の意味を理解することにした。そして、彼女とコミュニケーションをとることができるような関係作りに努めた。

また、彼女に当施設で行なわれている作業活動に参加してもらい、彼女の興味ある活動内容を把握し、更なる成長につなげていくことができればと考えた。

方法として彼女の言葉の記録、施設での作業や活動に誘導してみてもの反応や、それらへの取り組み方を1ヶ月ごとに記録する。そしてその状況を見てわかったことを踏まえ、課題や次回への対策を考えた。

ここで、「社会福祉学的介入（介入）」という言葉について簡単に説明をしたい。社会福祉学的介入（介入）とは、社会福祉学の理論に基づいて提供されるヒューマンサービスのことであり、人権擁護のための支援、ならびに社会保障に関する支援を行なうことである。なお、社会福祉学的介入（介入）は、医療、社会保障に密接に関連しているが、今回は福祉分野に焦点を絞り、知的障害者の生活福祉—施設生活においての作業、身辺生活の自立について研究を進めていきたい。

## 第1章 利用者とのコミュニケーションをめざして

### 第1節 コミュニケーションとは

大井学氏による「広汎性発達障害をもつ人のコミュニケーション支援」『障害者研究』を参考に、広汎性発達障害の少年と母親のコミュニケーション（会話）について例をあげ、障害をもつ人のコミュニケーション能力は一般の人には理解しにくく、誤解されやすいことを述べ、同時に障害の特性を知る者が、彼らにわかりやすく伝えることが大切であることを述べた。

### 第2節 支援プロセスにおけるコミュニケーション

白澤政和氏他『社会福祉援助方法』の中の「これからの社会福祉」を参考に、人と接するときの基本的な態度とコミュニケーションの技術として、コミュニケーションを、1. 援助プロセスにおける潤滑油としてのよい援助関係とそれを支えるコミュニケーション、2. 人と接するときの基本的な態度—コミュニケーションの原動力、3. コミュニケーションの難しさ、4. コミュニケーションの技術の4つに分け、コミュニケーションは人と接する上でいかに大切であるかを説明し、理解した。

## 第2章 知的障害者について

### 第1節 知的障害者の定義の変遷

今回の研究で知的障害者に焦点を当てることから、知的障害者を理解していただくために「知的障害者」という言葉がいつから使用され、その定義はどのようなものなのかを高橋智氏の「知的障害と学校教育」の中の『障害児教育の現状・課題・将来』、総理府『障害者白書』などを基に述べ理解した。

### 第2節 自閉症の定義

知的障害（精神遅滞、精神薄弱）と関係する障害として自閉症について説明した。自閉症障害の約70～80パーセントは精神遅滞も有するとされており、自閉症は医療定義上、知的障害および発達障害の1つに含まれている。そのため精神遅滞と並べてその定義についても述べた。

自閉症は遺伝的要因と環境的要因の相互作用により引き起こされる脳機能の発達障害および器質的障害であり、一般に誤解されがちな「自閉」症状の他にも幾つかの特徴的な障害が認められる障害である。

医学界における自閉症症例の初めての報告は、アメリカのカナーとドイツのアスペルガーの2人の医師によって今から50年ほど前のほぼ同時期になされている。アメリカの精神科医カナーは、1943年に「精神的接触の自閉的障害」という論文に11名の自閉症上の幼児の症例を発表し、その特徴を1. 対人的な情緒接触の欠落、2. 同一性保持に対する強迫的な欲求、3. 物事に対する異常な執着、4. 言語がないか、意味のある言語がない、5. 良好な潜在的能力、の5点にまとめ、これらの症状は2歳頃までに発症するものとしてその症状を「早期幼児自閉症」と命名した。翌年の1944年にオーストラリアの小児科医アスペルガーは、「小児における自閉的精神病質」という論文を発表、「極端な孤立を主徴とした子どもの症例を「自閉性性格異常」あるいは「自閉性精神病」として発表した。

その後、現在に至るまで自閉症についても数種類の定義がなされているが、現在定められている自閉症定義の共通点を要約すると、生後3年以内の幼児期早期までに発症し、情緒的な対人関係やコミュニケーションの能力、日常行動に自閉的な障害を受けている症候群のことを指している。

### 第3節 現在の知的障害者の呼称について

医学的な診断基準（DSM-IV等）では「精神薄弱、精神遅滞、自閉症」という言葉を使用することはあるが、現在では「知的障害」に統一されて用いられることが一般的である。

## 第3章 知的障害者更生施設について

### 第1節 目的

知的障害者更生施設とは、鈴木幸雄編『社会福祉用語ハンドブック』によれば、「18歳以

上の知的障害者の保護・更生を目的に、指導および訓練を行なう施設である。知的障害者福祉法に基づき、設置される知的障害者援護施設の一つ。医師、生活指導員（支援員）、作業指導員などを配置し、入所者が社会生活へ適応し自立できるように生活指導や作業指導などが行なわれ、通所施設もある。」と述べられている。

## 第2節 施設概要

今回研究対象とした知的障害者更生施設は通所であり、青森県内でも数少ない施設のうちの1つである。当施設は、2001年1月定員20名で開所、2001年10月に短期入所事業（児・者合わせて定員5名）で開所され、多くの利用希望者の要請により、現在では短期入所事業の定員が児・者合わせて18名に拡大された。

「1. 施設の一日の流れについて」では開所から閉所までを時間的に説明、理解した。また「2. 作業内容」では、当施設にて行なわれている作業について挙げ、説明を加えながら理解をした。例えば作業の一つとしてパン作業があるが、この作業は当施設から徒歩5分ほどの場所にある作業所で行なわれており、生地作りから焼きまでの工程を作業指導員の補助の下利用者が行ない、販売までを担当している。

「3. グループについて」では、当施設での利用者に対して分けられる3つのグループについて活動内容を説明し、理解した。1グループは、主にパン作業などを担当し、将来地域での就業を目指す人たちである。2グループは主に施設内での活動や作業を担当している人たちである。1グループと能力的にほとんど相違ないが、利用者自身のニーズで2グループに属していることが多い。3グループは、食事や排泄を始め、生活全般の介助を要する利用者が属しているグループである。散歩、機能訓練的対応、マッサージを行なっている。

## 第4章 知的障害者更生施設でのケーススタディ

### 第1章 対象者について

今回研究対象とした利用者について本人の母親からの聞き取りや、観察において本人を理解し、それらを記述した。

対象者はIQ17、障害判定では重度とされ、自閉的傾向（広汎性発達障害の1つ）、てんかん発作を持つ女性である。彼女は食事、移動、排泄など一人で可能であるが、不十分でもある。トイレではふき取りが不十分なため、現在はふき取りの練習をしている。「かつて、ちょうだい」という言葉を多く用い、「～したい、～してほしい」という希望や願望を相手に伝え、コミュニケーションを図っている。

### 第2節 対象者の施設での様子

対象者について1ヶ月ごとに施設での様子を観察、記録し、考察した。

対象者を4月から9月までの6ヶ月間にわたり観察してきた。断定できることは少なくまだ理解しがたいことばかりであり、新しいことに挑戦することが苦手ではあるが、支援員の長い

時間をかけてのコミュニケーションで、彼女自身半年間で新たに挑戦したことが数多く存在した。たとえば、藍染め作業、体育館でのダンス活動、地域でのボランティア活動である。これらの活動に参加するときというのは、彼女の気分がよいときに限られるが、それだけでも大きな成長であり、これからも新しい活動、作業に興味を示し彼女がますます成長し、さまざまなことに興味を持ってくれることを期待する。